

海田の歴史と文化を訪ねて ②

千葉家旧蔵資料は語る

生涯学習課 ☎ 8 2 3 - 9 2 1 7 FAX 8 2 3 - 9 2 5 6

広島県重要文化財に指定されている千葉家書院は、江戸時代中期の安永3年（西暦1774年）に建築されました。面皮柱を用い、床脇に付書院を組み合わせるなど、数寄屋風の趣向でまとめられています。付書院の欄間にみられる「波兔」は、謡曲『竹生島』の情景を图案化し



▲波兔

たものです。兎は月の精であり、不老不死・子孫繁栄を象徴しています。釘隠しにも兎紋が使われるなど、「月星紋」を家紋とする千葉家では好まれた意匠であったと思われる。

また、本座敷と次座敷の間に設けられた欄間には、空を渡る雁と芦が大胆な構図で配置されており、洗練された空間を生み出しています。

ふすまには、明治と大正時代の京都の画家、山崎宏堂による「竹林図」が描かれています。水墨で描かれた画面からは静けさが漂い、往來の喧騒を忘れさせてくれます。千葉家旧蔵資料の調査をすすめるうち、興味深い発見がありました。前代のふすま絵と思われる絵が4面見つかったのです。描いたのは、広島藩御用絵師の山野峻峰齋で、画題も同じく「竹林図」でした。千葉家の竹林へのこだわりが



▲竹林図

感じられるとともに、書院全体の意匠や構成において、このふすま絵も重要な要素と捉えられていたことがわかります。かつての賓客もここに座り、庭を眺めながら旅の疲れをいやしたのでしょうか。

次回は、千葉家伝来の道具類について紹介します。

